2024 No.301

ぱれっと 9

仙台市市民活動サポートセンター通信 ぱれっと

特集 ながまち会で育む、お互いに少しずつ助けあう社会

“ぱれっと”には、仙台市市民活動サポートセンター（サポセン）にいろいろな人が集まり、それぞれの色（個性）が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。

一歩踏み出す気持ち芽生える「ワクワクビト」

「気づき」から広げていく音楽体験の世界

La boite a jouets―音楽の、おもちゃ箱―
代表 大橋（おおはし） 端月（はづき） さん（36）

大橋さんは、仲間5人と共に、「おはなしクラシック どなたでもコンサート」と名付けたクラシックコンサートを主催し、年齢や障がいの有無に関わらず皆で音楽を楽しむ場をつくっています。コンサートには、文字通り「どなたでも」楽しめる工夫がたくさん。0歳から入場可能で、車椅子や子ども用のバギー型車椅子スペースを設置。会場は常に薄明るい状態で、自由に入退室ができ、ライブ中継が見られる休憩室もあります。目指すのは、「お互いさま」の気持ちで楽しめるコンサートです。

大学で共に音楽を学んだ友人との再会をきっかけに、「また演奏したいね」と団体を設立。大橋さんを含めメンバーのほとんどが母親になっていたこともあり、子どもと家族向けに朗読も楽しめるコンサートを開催しました。子連れの家族だけではなく、障がい者にも視野を広げたきっかけは、2回目のコンサートに来場した、バギーに乗った子どもと家族との出会い。障がいのため姿勢を維持することが難しく、上演途中で退席した家族。子どもをロビーのソファで横にならせ、家族は定員を超えたとき用のライブ配信動画をスマホで見ていました。来場者自ら工夫する姿に、「楽しいはずのコンサートには、まだまだ見えないバリアがある。コンサートを、誰もが安心して音楽を楽しめる場にしたい」と考えました。メンバーと話し合うと、「私もメンバーも、母として、子どもとの入場や途中退室ができなかったり、泣いたら迷惑をかけると思ったりして、ためらう思いがあった」と大橋さん。保育士資格を持つメンバーや、障害者施設で働くメンバーの力も借り、試行錯誤して、年齢や障がいの壁を取り払う現在の「どなたでもコンサート」が生まれました。来場者からは、「途中退室できると思うと子どもと安心して来られた」「どなたでも参加できる配慮がとてもよかった」などの声が寄せられました。

今後は、自分たちのノウハウを、他のコンサートの主催者や演奏家に伝える研修をしようとしています。ワクワクする音楽体験の世界を、これからも広げていきます。

▲演奏中、字幕付きイラストやパフォーマンスで音楽が表す内容も分かりやすく

La boite a jouets ―音楽の、おもちゃ箱―（ラ ボワット ア ジュウエ）

フランス語で「おもちゃ箱」という意味。「子どもがおもちゃ箱を開けたときの感動や、ワクワクした気持ちを音楽で届けたい!」と活動しています。メンバーは、宮城学院女子大学音楽科の卒業生5人。主催コンサートのほか、学校や施設への訪問公演・演奏、音楽文化の情報発信に取り組んでいます。次回コンサートは、2024年9月21日（土）と2024年12月頃の開催を予定しています。

▲HP

活動を始める一歩を応援「コトハジメ」

みんなで楽しめるボッチャの体験会を一緒に開こう！

ボッチャとは、赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに、いかに近づけるかを競うスポーツです。特徴は、ボールを飛ばす手段が豊富で、年齢、性別、障がい、競技経験の有無に関わらず誰でも楽しめるスポーツだということ。ボッチャを一緒にプレーしてお互いの様々な違いや特性を知ることで、知らないことからくる差別や偏見、無関心などの解消にもつながります。東北大学公共空間ボッチャプロジェクトD&I（DIBO）は、そんなボッチャを楽しむことを通じ、誰もが生きやすい社会を目指しています。DIBOは、東北大学公共政策大学院の研究をきっかけに設立された団体です。DIBOが特に力を入れているのが、開かれた場でボッチャ体験をしながら、多様な人が交流し、理解を深め合える機会を増やすこと。これまでに、公共施設や市民活動団体からの依頼を受け、ボッチャを楽しんできました。DIBOでは、体験会の開催依頼を受け付けています。広報担当の佐藤多聞（さとう たもん）さんは、「パラリンピックイヤーの今年、共生社会について考えてみませんか?」と呼びかけています。様々な壁を越えて楽しめるスポーツの場を、一緒に開いて体験してみませんか?

▲体験会は、屋内でも屋外でも開催可能です

東北大学公共空間ボッチャプロジェクト D&I

体験会のお問い合わせはHPから▶

活動に役立つ書籍を紹介「お役立ち本」

格差と分断の社会地図　16歳からの〈日本のリアル〉

所得、職業、男女、家庭、国籍、福祉、世代の7つをテーマに、現在の日本の社会にある格差を記した1冊です。実際に起きた社会運動や事件、著者が取材したことなどの具体事例から、その背景にある社会課題を紐解きます。読み進めると、自分とは違う立場の人たちのことを知ろうとしない無関心が、分断へと繋がると気づくことができます。私たちのすぐ近くにある課題について知ることから始めませんか。

著者:石井 光太　出版:日本実業出版社

つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。
「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。お気軽にご相談ください。

今月の休館日 9月11日（水）、25日（水）

開館時間　月曜日～土曜日 9:00-22:00
　　日曜日・祝日 9:00-18:00
休館日　毎月第2・第4水曜日（祝日の場合は翌日木曜日）年末年始

〒980-0811　仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL 022-212-3010　FAX 022-268-4042
[ホームページ]https://sapo-sen.jp
[サポセンブログ@仙台]https://blog.canpan.info/fukkou/

「ぱれっと」バックナンバーはホームページからダウンロードできます。▶▶▶

ほぼ毎日更新している「サポセンブログ@仙台」で、取材の様子やこぼれ話を配信しています。

編集・発行
仙台市市民活動サポートセンター
（指定管理者：特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター）
発行日　2024年9月1日
デザイン　PEACE Inc.

[X（エックス）]　@SCSC4CA
[YouTube]　サポセンちゃんねる

特集

協働による活動事例を紹介「ちまたのコラボ」

ながまち会で育む、お互いに少しずつ助けあう社会

仙台市太白区にある長町地区は、1997年から2018年にかけて整備されてきた「あすと長町エリア」と、江戸期から奥州街道の宿場町として発展してきた、昔ながらの3つの商店街があるまちです。商店街を拠点に、NPO法人スロコミと、まごころサポート仙台ユカリエ店（以下、まごころサポート）が、2023年2月から毎月第3木曜日の夜に「ながまち会」を開いています。ながまち会には、「長町で何かしてみたい」「まちづくりのお手伝いをしてみたいけど、誰に声かけたらいいか分からない」という人や長町好きの人が集まります。まちづくりのアイデアを発表したり、応援したり、誰かを紹介したりしながら、多くの人がまちづくりに参加する仕掛けをつくろうとしています。

NPO法人スロコミ

代表

はやし　くみ
林　久美さん

長町商店街で、認知症・要介護者向け在宅介護サービス「マイムケア長町」を運営する傍ら、NPOとして、同施設内に交流スペース「マイムテラス」を開いています。お互い様の精神で、助け合える社会を目指し、「他人以上、友達未満」のコミュニティづくりに取り組んでいます。

まごころサポート仙台ユカリエ店（株式会社ユカリエ）

責任者

さとう
佐藤みゆきさん

電球交換や庭の手入れなど、ちょっとしたシニアの困りごとを解決するのが「まごころサポート」です。株式会社ユカリエは、不動産業を営んでいて「100歳になっても住みたいまちをつくりたい」との想いから、まごころサポートに加盟し、長町商店街からスタートしました。

運営・協力団体

株式会社ミライデザインワークス ／ ジーバーFOOD 仙台本店 ／ 株式会社えんにちと
まごころサポート宮城ミライデザインワークス店 ／ 株式会社ユカリエ（順不同）

自分が楽しいと思うことを、まちづくりにつなげる

まちづくりのアイデアを発表できる交流会

アイデア実現「ながまちトイカプセル」

アイデア実現「スロ茶屋」

ながまち会で発表するアイデアの条件は、長町商店街の活性化や、長町の楽しい未来に貢献できること。これまで様々なアイデアを実現させてきました。例えば、まごころサポートの佐藤みゆきさんが提案した「ぐるぐるながまち」。毎月第3土曜日、10時にJR長町駅西口広場に周辺住民20人ほどが集合し、商店街のゴミ拾いに出かけます。佐藤さんは、「知り合いができたり、お気に入りのお店を見つけたりしながら、長町を好きになってもらいたい」と狙いを話します。午後になると、スロコミメンバーが提案した「スロ茶屋」が、マイムテラスの軒先に出現。椅子やテーブルを出し、通りがかりにさくっと一杯、お茶やお酒を飲める憩いの場です。これらのイベント会場や、商店街の店先に現れる「ながまちカプセルトイ」も、実現したアイデアのひとつ。カプセルの中には、長町にちなんだオリジナルデザインの缶バッジや商店街で使えるクーポン券などが入っています。単なるグッズではなく、商店街や長町の人とのコミュニケーションが生まれる仕掛けです。スロコミの林久美さんは、「ながまち会は、まちづくりを気負わずに話せる場所。アイデアを誰かに話してみると、何かきっかけがつかめるかもしれません」と話します。

1 ねらい　様々な課題の根っこにある、コミュニティの希薄化

佐藤さんは、「高齢になり、ゴミ出しや買い物など日々の暮らしに不安を抱いていても、少しのお手伝いさえあれば、地域で暮らし続けられる」と、実感を込めます。一方で、ちょっとした困りごとを頼み合える人が近くにいないという現実も感じていました。また、林さんは、要介護や認知症の人が住み慣れたまちで自分らしく生きていける社会を目指し奮闘してきました。認知症になると、早くから施設に入るのが当たり前とされていますが、少しのサポートがあれば生活できる人もいます。「周囲の人が、認知症の人を怖いと思ったり、高齢者に限らず、いざという時に誰かに助けを求められなかったりするのは、日頃のつながりがないから」と、林さんは指摘します。

他分野の人たちとのコラボレーションで、福祉サービスだけでは解決できないことにもチャレンジできる

2 ポイント　アイデア実現を通じて広がるつながり

自分たちだけでは出会えない人たちと出会うことができた

「長町での暮らしや商店街をもっと良くすることを通じて、人との関わりを生み出したい」。佐藤さんと林さんの共通の願いです。ながまち会の強みは、持ち込まれた「想いのタネ」を形にしていくプロセスに、多くの人が関わること。

例えば、「ぐるぐるながまち」の始まりは、まごころサポートのスタッフ3人が、街歩きを楽しみながらしていたゴミ拾いでした。佐藤さんは、「歩きながら、知らなかったお店を発見したり、店主と挨拶を交わしたりできるのが楽しかった。一緒に歩く仲間を増やして、この楽しみを共有したい」と、ながまち会にアイデアを持ち込みました。すると、「ユニフォームを作ろう」「ロゴをデザインしたい」「助成金があるよ」などと、様々な情報やスキルが集まりました。ながまち会参加者の紹介で取材も入り、新聞で取り上げられると、幼い頃を長町で過ごしたという人が「久々に長町を歩きたくて」と、他都市から参加したこともありました。アイデア実現に向けて集まった人の分だけ応援が増え、顔の見える関係も広がりました。

3 これから　しがらみも孤立もない、ゆるやかなつながりを

林さんは、「顔が見えて、お互いにちょっと気に掛けるくらいがちょうどいい」とコミュニティ維持のコツを話します。ながまち会をきっかけに、まちのあちらこちらで、力の貸し借りが生まれ始めています。佐藤さんは、「高齢化が進むなか、私が100歳になっても住みたいと思うのは、応援する人もされる人も一緒に活躍できるまち。そんなまちを、林さんや長町のみんなとつくってみたい」と思いを膨らませます。

ながまち会

▲ながまち会
（NPO法人スロコミfacebook）

アイデア発表者、
参加者、協賛募集中!